

公民科倫理の役割についての一考察

- 高校生の意識調査をもとにして -

岐阜県立大垣南高等学校 大橋弘志

1. はじめに

平成 15 年度から高等学校にも新しい学習指導要領が導入され、高等学校の公民科では現代社会の標準単位数がこれまでの 4 単位から 2 単位となり、多くの高等学校で公民科の履修科目が変更された。学習指導要領の改訂以前は現代社会(4 単位)を履修するか、政治経済(2 単位)と倫理(2 単位)の 2 科目を履修するかであった。普通科高校の場合、後者の 2 科目の組み合わせを公民科必修分として履修することが多かったが、改訂により現代社会(2 単位)のみで必修分を履修する学校が増えてきた。これはすなわち倫理を履修しない高校生が増えていくことを意味する。

1999 年版学習指導要領(第 7 次改訂, 2003 年実施)では、学校教育全体において「生きる力」の育成がもめられることになった。この改訂の注目は「総合的な学習の時間」が創設されたことである。そして、生きる力の核となる心の教育という観点から「倫理」の役割が明確化された。総則にもあるように、高等学校における道德教育の役割を一層良く果たすことができるよう、人間としてのあり方生き方に関する教育を中心とした内容になっている。指導の内容は以下の通りである。

(1) 青年期の課題と人間としてのあり方生き方

ア. 青年期の課題と自己形成 イ. 人間としての自覚 ウ. 国際社会に生きる日本人としての自覚

(2) 現代と倫理

ア. 現代の特質と倫理的課題 イ. 現代に生きる人間の倫理 ウ. 現代の諸課題と倫理

大項目の「(1)青年期の課題と人間としてのあり方生き方」では、これまでの指導要領の内容にみられる青年期の意義と課題についての理解に加えて、国際社会に生きる日本人としての自覚を含めている。「ウ.国際社会に生きる日本人としての自覚」では、日本人としてのものの考え方の特質について、国際社会に生きる主体性のある日本人という枠で、日本人のあり方生き方を考えることをもめている。考え方の順序として日本人にみられる人間観、自然観、宗教観などの特質を探り、風土や伝統、さらには外来思想の受容にふれながら日本人のあり方生き方を見だし、外来思想との調和と伝統の維持という特質に注目し、そこから一足飛びに主体性のある国際的日本人へとつなげる内容になっている。国際社会における「生きる力」は主体性をもつことであるという展開である。「(2)現代と倫理」では現代の倫理的課題をとらえることで、現代に生きる人間としての課題を考えさせ、それを主体的に追究していくことをもめている。改訂の大きなテーマである「生きる力」を意識して、課題に対して主体的に取り組む態度や学び方を学ぶ姿勢、自ら考える力の育成に視点をのけた項目である。しかし、こうした文部行政の意図とは異なり、高等学校の履修科目は倫理をはずして現代社会の履修に流れている。

2. 倫理教育の現状と高校生の意識

教育現場での倫理の指導の現状を振り返ってみる。倫理とはどんな科目かということ、西洋とくに

近代以降の西洋思想史をイメージする指導者が多い。副教材も「倫理」がまだ「倫理・社会」であったころの指導内容を継承したものが出版されていることが多いので、現行指導要領の倫理の教科書を使っているにもかかわらず、思想の源流という項目で古代ギリシアの思想やキリスト教、イスラム教が登場すると教科書を離れて、副教材を利用して西洋思想について詳しく解説をすすめていく例が見られる。あたかも世界史の文化史を補うかのような科目になっている。そのために、学習指導要領がかかげる「日本人としての自覚」にかかわる日本の思想についてはふれないままで年間の授業を終えていくことが多い。

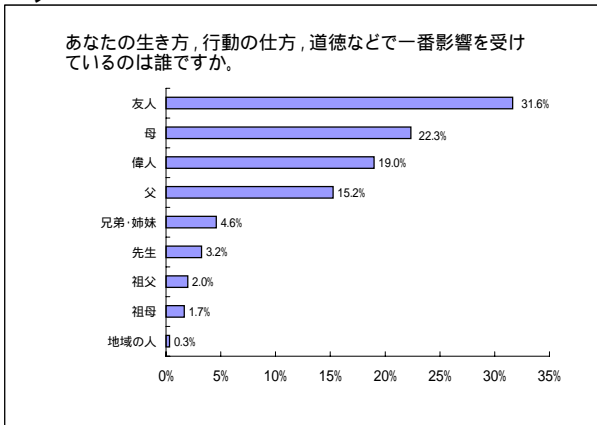
一方で大半の普通科高校では、生徒は1年次の後半には、2年次から分けられる教育課程のコースを選択しなければならない。文系か理系かなどの最初の進路決定に直面し、自己を見つめ、あり方生き方を考える機会をもつことになる。自分とはどんな人間なのか、そして人間としてどうあるべきかを考える時期に、倫理の授業が果たす役割は大きいと思われる。役割といっても先哲の教えをそのまま引用してこう生きるべきと、あり方生き方を押しつけるものではない。倫理の役割は、生徒が自己のあり方生き方をどのように考えるか、そのためにどのような道筋を辿って考えをすすめていくべきか、その方法を教える時間にあることではないかと考える。

勤務校では毎年さまざまな角度から高校生への意識調査を実施している。3年前の調査では「若者の心の支えに関するアンケート」を大垣南高等学校の全生徒（有効回答数 966 人）に行なった。この調査は生徒の価値観や倫理観に関わるものを探ることを目的とし、あり方生き方を具体的にあらわすための設問および選択肢はすべて担当者が準備した。調査結果のうち8項目について、次の図に示した（図1参照）。

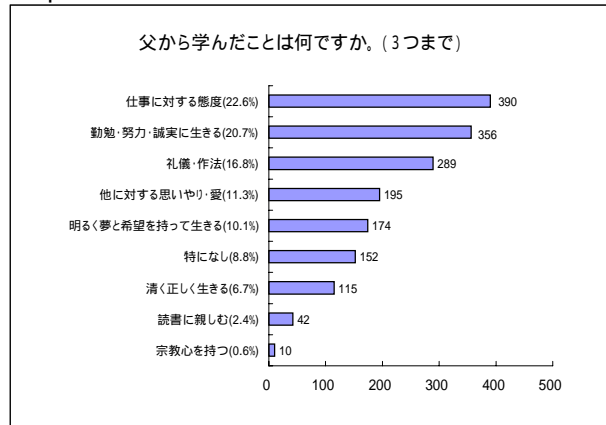
回答の傾向は多くの教師が予想した内容とはやや異なるものとなった。アについては、生き方に影響を与える存在として30%以上の生徒が【友人】と答えた。【父】よりも【偉人】が上位に入ったことには驚いた。【友人】が上位になるであろうということは予想していたが、本やメディアの向こう側において、生徒にとっては実感も実体もない人間のあり方生き方にも注目していることがわかる。その人物は高校生が求めるひとつの理想的人間像のモデルとして考えていることを示している。乾いた綿に水が吸収されるような勢いで、自己のあり方生き方を模索している高校生の心の内を見ることができる。こうした現状や実態を踏まえ、倫理の指導によって彼らに何ができるのか、指導のあり方を検討したい。イとウについては理想的父親（男性）像と理想的母親（女性）像をイメージして答えていると考えられる。男には仕事や勤勉・努力が必要と考えており、女には礼儀、思いやり・愛情が必要と考えている。この結果は当校の地域性による部分が大きく、都市部の高校生への調査では異なる結果が得られるであろう。エでは「心を支える」存在をたずねているが、やはり【友人】が最も多く、次いで【家族】の順になっている。複数回答にしてあるので3つ目に何を選ぶかで意見が分かれたが、4人にひとりが【夢と希望に向かって生きる情熱】を選んだ。これはこのときの校長の教育方針が大きく影響しているものと思われる。当時の校長は「思いっきり青春、思いっきりチャレンジ」をモットーに、壇上に立つたびに生徒の活躍を誉め讃え、生徒がそれぞれに輝くものを持っているということを強調し、「夢の実現」、「希望」、「若いエネルギー」といった言葉を使って生徒に語りかけた。徳目を並べ立て、朱子学的な倫理観に基づく形式的な人間像を押しつけることはしなかった。この教育方針の効果があらわれているのではないかとと思われる。才は一

図1 若者の「心の支え」に関する調査

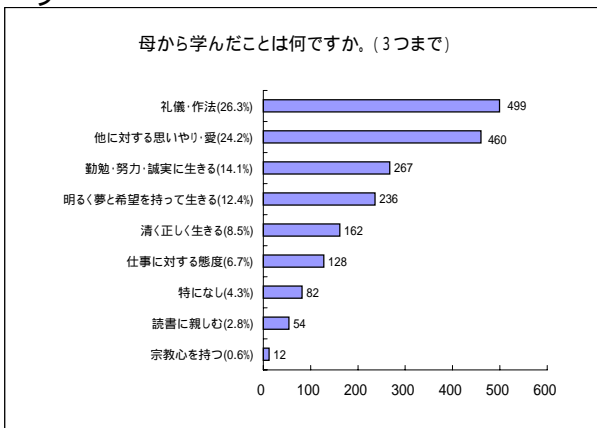
ア



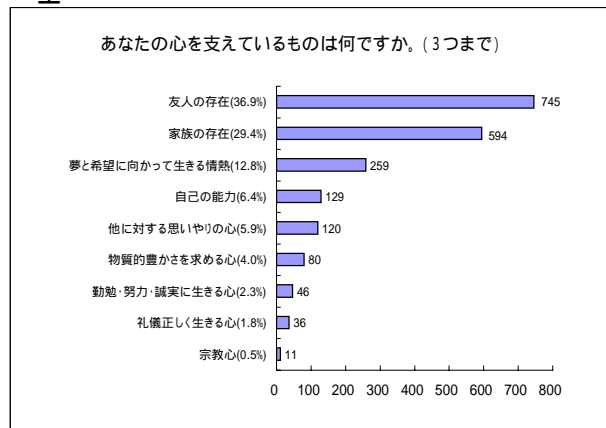
イ



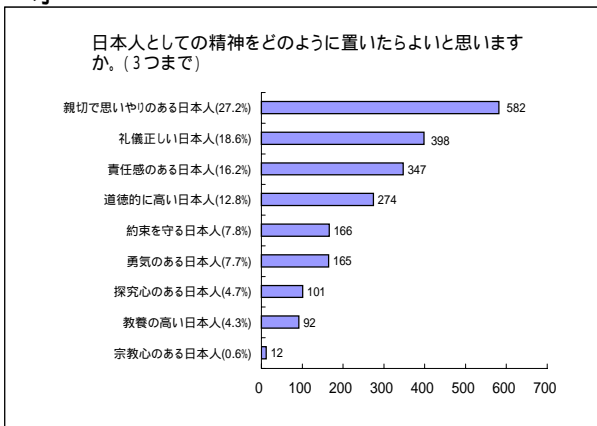
ウ



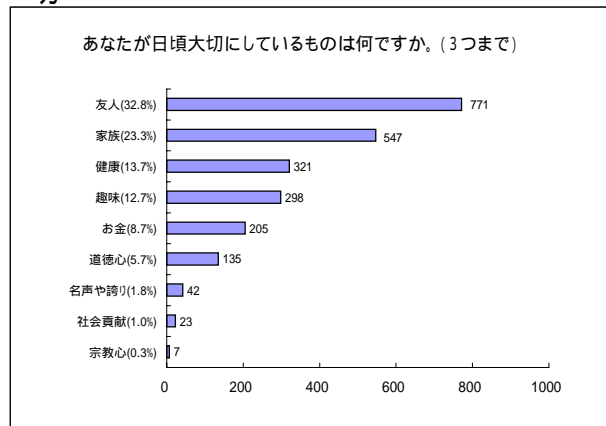
エ



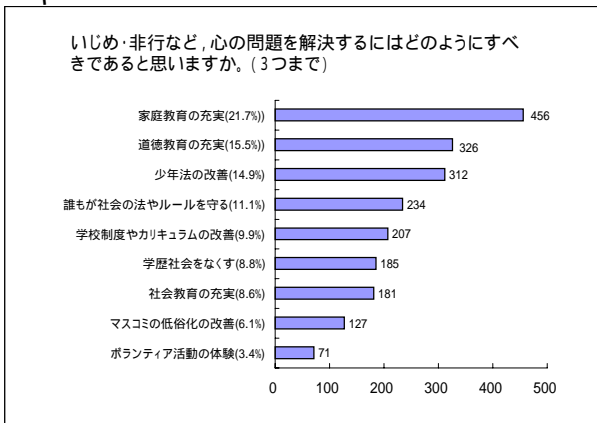
オ



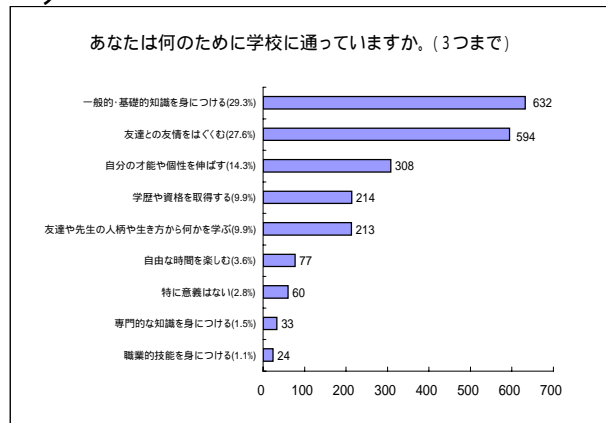
カ



キ



ク



つの理想的日本人像と考えられる。【親切で思いやりのある日本人】を全校の 60%近い生徒が選んだ。この優しさはいつの時代も男女を問わずもとめられることのようにである。次に多いのは【礼儀正しい】【責任感のある】日本人であった。文部科学省がかかげている「主体性」や「生きる力」の育成によって目標とされている日本人像は、自分の意見や考えがしっかり主張できる人間であり、強さや勇気をもった国際的に通用する日本人である。しかし、高校生の描く日本人の理想像では【勇気ある日本人】はわずかに7%となっている。力では、日頃大切にしているものを有形無形に関わらず選択肢に用意してみた。【友人】が最も多いのは予想通りであるが、【家族】、【健康】が上位に並んだ。【社会貢献】は諸外国から日本人に求められていることであるが、文部科学省の思惑とは異なり低い数値となっている。キは現実の問題に対してどのような認識をもっているかをみる質問である。回答からわかることは、いじめの加害者・非行を繰り返す者は抑えなければならないという立場をとり、そのためには大胆な社会のシステムの改革よりも、社会秩序の見直しや、身近な家庭や学校の教育の枠内でできるものから変えていこうという考えがみられる。自分の問題としてとらえていることもわかる。クでは学校の意義・目的を質問した。回答は【一般的・基礎的知識を身につける】と【友情をはぐくむ】が上位2つを占めている。資格や専門的知識、技能などの実学的な要素を求める生徒は少ない。大学進学は目標であるかもしれないが、学校にもとめているのは、自身の意欲に基づく一般的・基礎的知識の獲得であった。理解することの喜びや友人達との時間をとめて学校に来ている現代の高校生の姿が浮き彫りにされた。

この調査では、「心の支え」も「大切にしているもの」も1位は友人であった。必ずしも深いつきあい方をしているとはいえない彼らの友人関係が、高校3年間の様々な曲面に際して、自らの成長の糧となりうるのか、そしていわゆる「生きる力」の育成につながっていくのかを考えると、そこには迷える高校生の姿がある。自分たちが築いている人間関係が希薄であることに気づいており、何を学びどんな人間をみざすべきかということもわかっている。「生きる力」を構築していくための原動力にあたるものが、自分たちには不足していることも理解している。しかし、そのために自分が今何をすればよいのかはわからないのである。この壁を越えて、生き方の美学を形成できるまでの力を高校生に与えることはできないものであろうか。

こうした高校生の問題点を全国の公民科の担当者がどう考えているのを知る機会があった。札幌で行われた全倫研（全国高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会）の平成14年度総会に参加した際に、「倫理思想をどう取り扱い、どう深めていくか」をテーマとする研究討議に出席した。会場には現役の高校教師の他、すでに退職して何年か経っている元教師も参加していた。討議は「日本人のあり方生き方」についての意見交換となり、会場の参加者から老若を問わず活発な意見が飛び出した。「われわれは生徒たちに、日本や日本人について何も教えてこなかった。結果として日本人としてのモラルの低下が問われる時代になった。日本とはこういう国であるとか日本人とはこういうものであるともっと教えるべきだった」という発言や、「生徒には日本人としての自覚そのものがないのであり、自覚をさせることで日本人とは何かを考えるようになるのではないか」、「国際化とは西洋の先進国のまねをすることではなく、国際化の時代だからこそ日本人のあり方生き方をしっかり教えるべきだ」などの意見がでてきた。これまで避けて通ってきた部分に対して、多くの教育者に何とかしなければという思いが高まりつつあることを実感した。

3. 公民科倫理のあり方への提案

公民科教育が取りくんでいる主題は、人間としてのあり方生き方についての自覚、公民としての資質の育成である。平成 15 年度の日本社会科教育学会のシンポジウム、全国社会科教育学会のシンポジウムはともに、公と個・公と私をどうとらえるかをテーマとして、あるべき人間像、市民像、個人像をどのように描くかが討議された。21 世紀の社会を生きていくためには、より一層の個の確立が要求されると考える。それは人間としての自己のあり方生き方の確立であり、市民としてのあり方生き方の育成を意味する。生徒がそれぞれの感性をはたらかせ、自己をみつめる機会をもち、人間としてのあり方生き方についての思索を深めることを主題とした指導を行なうことが倫理教育であると考えたい。そのために指導法の研究や教材の工夫によって倫理の授業を変えていく方法もあるが、今年度、私は「日本人としてのあり方生き方」という価値観を基層におき、自己を見つめる機会をつくる指導を試みた。残念ながら勤務校では新課程導入にともない倫理を履修科目からはずしてしまったので、導入されたばかりの「総合的な学習の時間」を利用してこの主題に取り組むことにした。

勤務校での「総合的な学習の時間」は、実施の 4 年前から検討を重ね、20 人から 30 人を定員とする講座形式で行なうこととした。講座の主題と内容は各教科に委ねられ、教科に割り当てられた講座数に応じて、担当者と講座名および内容を決めることになった。科目を越えた横断的な要素を含んだものとすべきであるという本来の趣旨に沿って検討した結果、担当者の得意分野に関するものを題材として講座を開くことに落ち着いた。私は「日本人としてのあり方生き方」に帰結するものとして、日本人の信仰心をテーマとする内容を提案した。とくに公民科倫理の指導内容の「日本の思想」から、日本人の自然観について考察し、古代の日本人の精神と外来思想として受容され、心性の柱となっている仏教、あり方生き方を行動の面から支える儒教思想の内容を取りあげ、日本人の信仰心の形成を理解させることにした。まず、自然崇拜とアニミズム（精霊崇拜）に着目し、死と再生の円環、縄文人の自然観を紹介した。また、身近な神について取りあげ、日本の神話に含まれる意味まで考えさせた。さらに、日本人の心にどのように仏教思想が取り込まれていったかを説き、行動様式に影響を与えていると考えられる儒教思想を取りあげた。講座の後半では、宮崎駿の映画『もののけ姫』を教材にして、それぞれのシーンに含まれる意味を読み解きながら日本人の信仰心についての考察を深めることとした。前期・後期それぞれ 12 回実施することとし、半期 12 回分の内容の構成を表のとおり組み立てた（表 1 参照）。

「総合」の授業のときに心がけてきたことは「あなたはどのように感じたか」「あなたの感性ではどうとらえたか」という問いかけをすることであった。感性でとらえたことに正解・不正解はない。生徒が頭と心で考え、感じたことを引き出すことができればよいのである。回を重ねるごとに生徒は自分の感じたことを答えるようになってくる。一例を示すと前期の講座のなかで、「精霊」について考えたことをたずねてみた。自分の感性をはたらかせて感じたままに答えるようにすすめると、ほとんどの生徒が「精霊はいると考えたい」と答えた。多かった感想をあげると「精霊というのはその生き物や植物についている守護神のような感じがする。だから、どんなところにも植物は生えるし、一度全部の葉っぱが落ちて枯れたような木でも、強く生きていくからそれには強い精

霊があるからなのでは…。木などが季節で変わっていくサイクルにも精霊の力があると思う」などであった。

表1 日本人の信仰心についての内容構成

プロローグ

「この世」と「あの世」・ハリ=ポッターの「異界」・現代の葬式から
自然崇拜とアニミズム

縄文人の自然観・死と再生の円環・精霊の世界観・心の原風景（山折哲雄）
八百万神と神道について

初詣や夏祭り，七五三，合格祈願とは・古代の神道・伊勢神宮・八幡神
ヤマタノオロチを読む

日本神話に含まれる意味

外来思想の受容…古代の仏教（前）

聖徳太子の国家づくり・国家仏教・南都六宗

外来思想の受容…古代の仏教（後）

遷都と密教・現世利益・浄土信仰・阿弥陀信仰

怨霊信仰と人々の生活

平安期のたたりと呪い・北野天神の話・物忌みと方違え

中世の思想…無常観

諸行無常・文学にみる無常観・日本的な美意識

『もののけ姫』から…タタリガミとは

『もののけ姫』から…タタラ場について

『もののけ姫』から…乙事主の闘い

『もののけ姫』から…シシガミの森がもつ力

倫理の授業を10年以上にわたって担当していると、生徒の持つ感性の豊かさに気づくときがある。今回の指導の根本においたのは、いかに生徒の感性をはたらかせることができるかである。教材となる人物・対象、実際の倫理の授業の中では思想家のあり方について深く理解し、その上で自己との共感というプロセスを積み上げる。この過程を経ることにより、自己を見つめる機会を作り、自己のあり方生き方に迫る自己認識へと導いていく。感性のはたらきによる理解と共感、さらに自らへの問いかけによって深い認識へとつながる過程は、学習をする基本的な姿であり、いわば学びの本質であろう。そして、彼らの感性の原点にあたるものはやはり日本人としてのものの感じ方や見方である。今回、「総合」の枠を活用した試みは、教材の問題や教科としての評価規準など学習指導要領の指導内容を満たしていないためにそのまま実際の授業に生かすことはできないが、今後の倫理教育の基本的な姿勢に関わる部分を提案することができたと考える。時代は刻々と変化し、日本人としてどう生きるかを考えなければならない状況になりつつある。このようにしなやかな感性を根底にもっている高校生に対して何ができるのか、倫理および公民科教育全体が担っている役割を考えなおさなければならない時代になった。

文献

- 相良 亨 「日本人の考え方・感じ方」『日本人の心と出会う』花伝社 1998年
- 原田敏明 「古代宗教論」『岩波講座日本歴史2 古代2』岩波書店 1962年
- 立川武蔵 『日本仏教の思想』講談社 1995年
- 末木文美士 『日本仏教史 思想史としてのアプローチ』新潮社 1996年
- 湯浅泰雄 『古代人の精神世界』ミネルヴァ書房 1980年
- 川村邦光 『日本の宗教』東京美術 2000年